

[成果情報名] 三重県における水田雑草発生の特徴と変化

[要約] 県内水田圃場において雑草の発生状況を調査したところ、ノビエやホタルイ、キシユウスズメノヒエ等で過去最多の発生が確認された。今回新たに調査対象としたヒレタゴボウは7割以上の地点で発生が見られ、急激な分布の拡大・広域化が確認された。

[キーワード] 水田雑草、ヒレタゴボウ、発生実態調査

[担当] 三重県農業研究所 農産研究課

[分類] 普及

[背景・ねらい]

水田雑草の草種や発生程度は、使用される除草剤の有効成分や水稲栽培体系等の様々な要因により変化する。これまで三重県では、スルホニルウレア(SU)系除草剤抵抗性雑草が蔓延し始めた 2001～2002 年、新規有効成分の上市や作付体系の転換が見られた 2012～2013 年の 2 回、県内全域で発生実態調査を行った。前回調査から約 10 年が経過し、農業経営の規模拡大等により、水田雑草を取り巻く環境には変化が予想される。そこで再び実態調査を行い、当県における雑草発生の特徴と変化を明らかにする。また、近年現場で問題となっているヒレタゴボウについても、今回新たに調査を行い、発生状況を確認する。

[成果の内容・特徴]

1. 県内水田圃場において雑草の発生状況を調査した結果、一年生雑草を 31 種、多年生雑草を 9 種、湿生雑草を 9 種、イネ科匍匐性雑草を 6 種確認した（データ省略）。
2. 一年生雑草では、ノビエの発生圃場が多く、過去最多となる 37%の圃場で確認された。アゼナ類やコナギも前回調査と同程度となる 25%程度の圃場で見られ、一定数の発生が確認された（図 1）。
3. 多年生雑草では、ホタルイが過去最多となる 39%の圃場で確認され、平均発生程度も全草種で最大となる 0.8 であった（図 1）。また、コウキヤガラが伊賀地域で初めて確認され、発生地域の広域化が見られた（データ省略）。
4. 湿生・畦畔雑草では、イボクサの発生圃場が多く、全草種で最多の発生率となる 44%の圃場で確認された。また、キシユウスズメノヒエは前々回調査から 1.7 倍の発生圃場率となり、前回調査に引き続き拡大が確認された（図 1）。
5. ヒレタゴボウは県内の 72%の地点で発生が見られ、桑名地域及び四日市地域では調査した全地点で発生が確認された（図 2）。また、発生程度「中（一部で群生）」以上の地点については県内で 26%見られ、水稲収穫作業への影響は甚大であると考えられた。

[成果の活用面・留意点]

1. 本結果について、水田残草は水稲移植後 50 日頃に県内水田圃場 145 地点（約 300ha）で、ヒレタゴボウは登熟期（8 月上中旬）に同 144 地点で調査したものである。
2. 県内水田圃場における雑草の発生状況や特徴を把握することで、今後の防除対策を検討することができる。
3. ヒレタゴボウは急激に広範囲で発生が見られることから、発生動態等の解明を進めるとともに、効果的な防除方法を確立する必要がある。

[具体的データ]

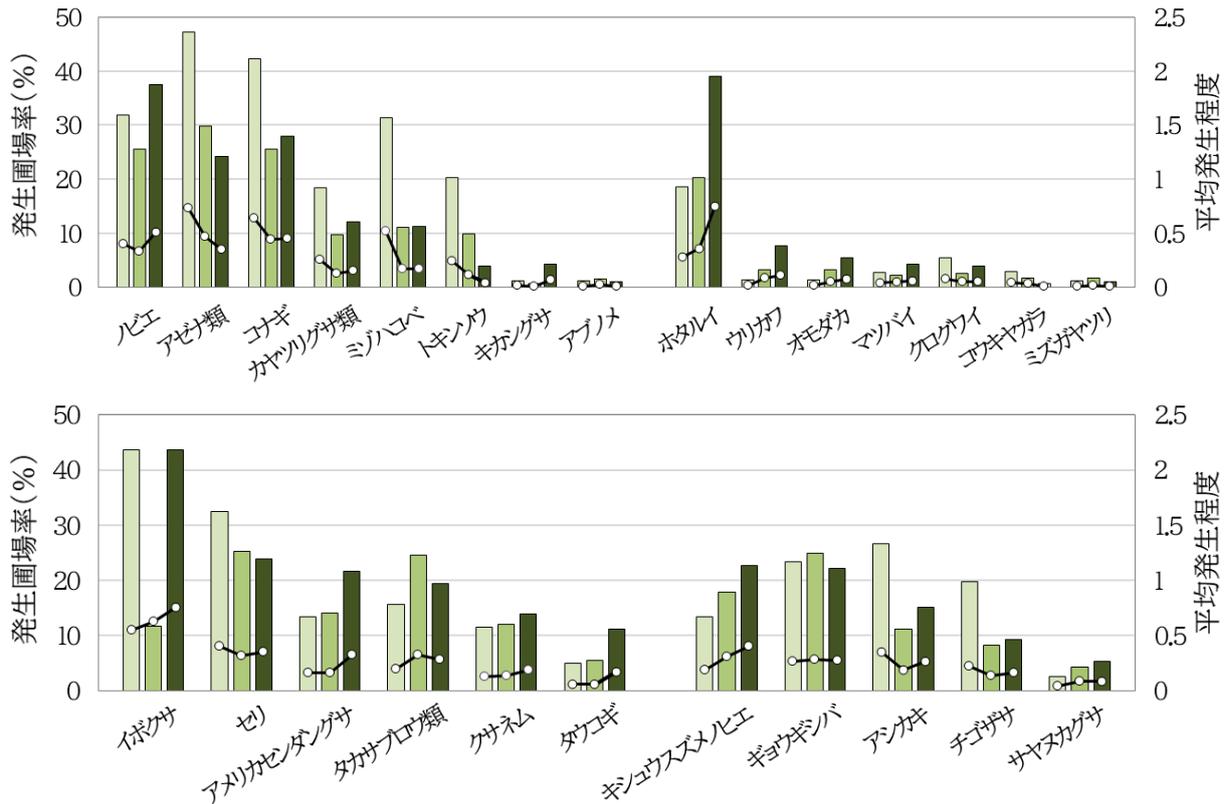
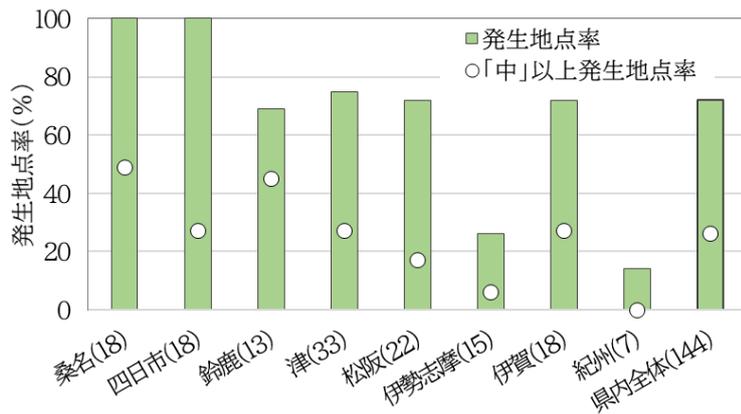


図1 県内水田圃場における主な発生雑草

注) 県内 145 地点において連続する各 10 筆を調査。調査は移植後 50 日頃(6 月中下旬)に実施し、畦畔から遠観で草種と発生程度を 6 段階で評価(無～甚)。発生圃場率は調査した 1450 筆のうち当該雑草の発生が確認された圃場の割合、平均発生程度は各雑草の 6 段階評価結果を 0～5 の値で加重平均したものの。



注) 調査は水稻の登熟期(8 月上中旬)に実施し、遠観で発生程度を 4 段階で評価(無～多)。地域名は各普及センター管内を、カッコ内は調査した地点数を示す。「中」以上発生地点率はヒレタゴボウが「中」又は「多」発生していた地点の割合。

図2 県内各地域におけるヒレタゴボウの発生状況

(大野鉄平)

[その他]

研究課題名：三重県の植物防疫に関する共同研究（水田雑草発生実態調査）
 予算区分：共同研究（三重県植物防疫協会）
 研究期間：2021～2022 年度
 研究担当者：大野鉄平、山吉咲綺、佐藤恒亮